

# 吉田 司さん

(ノンフィクション作家)

## 時は乱世。出でよ異論奇論！(下)

人間の尊厳をかけた闘いの先頭に立つことで老人は生きる力を取り戻し、高齢・少子化時代の新しい共同体モデルを示すだろう。そして、二十一世紀型の核廃絶運動へ……。二回にわたって吉田さんの東北、日本、人間、そして未来へのまなざしを聞いた。

### 日本を救う東北の「老人力」

——まずは前回のナゾかけ、「直接行動の先頭に命を懸けて立ち続けるのは、若い支援者たちではなく、東北の後期高齢者のおじいちゃん、おばあちゃん、彼らだけが、いまの「日本を救う」ことができる」とおっしゃる理由から、話していただけますか？

本当に東北の救済を願うのであれば、東北へ援助に行くのではなく、東北が東京に攻め上がってくるよう支援のベクトルを逆流させねばなりません。

無能な国会と東電へ攻め上がる「被災民の直接行動」という図式は、実は復興速度をアップさせる最も手取り早い方法なんです。法案の成立なんて待たずに、直接国会へ取りに行けばいいんです。

一九五六年にアメリカ占領下の沖縄で起きた大規模な反基地運動(島ぐるみ闘争)のように、被害民が、子供から老人まで、家族ぐるみで決起するべきなんです。東北人も幟を立て、席旗の代わりに「放射能まみれの稲藁」でもシンボルに掲げて、車なんか使わずデモ行進で村から町へ、という具合に、大東京の国会、東電本社めがけて攻め上がるんです。七〇年代水俣病

患者たちはチッソ本社占拠闘争に立ち上がったじゃないですか。

途中、熱中症などでバタバタ倒れるかもしれない。しかし、それを守護するかたちで、行く先々で人々が加勢し、デモの波は拡大するでしょう。東京の若者中心の「反原発」デモでさえ、一〜二万人は集まるのですから。「義を見て(助太刀)せざるは勇なきなり」の儒教倫理は、いまだ有効です。あるいは、死んだ宇井純(公害問題研究家)の「公害(放射能)に第三者なし」の、あの言葉を思い出せ、ですよ。

私の早稲田大学ストライキから始まる約四十五年のデモ経験から言うと(笑)、地域ぐるみ・家族ぐるみの闘争で、最初に前衛となるのは過激な若者・青年行動隊では決してない。いつも老人たちなのです。成田空港反対の老人行動隊は、三里塚の御料牧場の存続を訴え皇居に直訴し、行動隊長の菅沢老人は、スイカ畑を踏み散らす数百の機動隊に「天皇陛下になり代わって征伐する!」と叫び、人糞をぶっかけ、たった一人、肥びしやくを振りかざして突入した……。

水俣病患者互助会の裁判リーダーの渡辺栄蔵翁は「たったいまから私たちは国家権力に立ち向かうこととなりました」と宣言し、患者家族の老人たちは、チッソ会社との直接交渉では、泣きながら社長の胸ぐらをつかんで、「死んだ娘、息子や孫を返せ」「金はいらん。生かして返せ」と、口々に叫んだ。

これは、同じ人間としての道義を問う闘いなんです。いま東電会長や通産省の「悪徳官僚」や菅直人・前首相らの胸ぐらをつかんで、こみ上げる怒りを直接ぶつきたい日本人は、いっぱいいるんじゃないかな。なぜ、そ



●よしだ・つかさ 1945年山形県生まれ。早稲田大学在学中に映画監督小川紳介と小川プロを結成し、『三里塚の夏』などを制作。70年から水俣に移り住み、88年、水俣での経験をまとめた『下下戦記』(白水社、文春文庫)で大宅壮一ノンフィクション賞を受賞した。近著に『王道楽土の戦争〜戦前・戦中編』『王道楽土の戦争〜戦後60年編』(NHK ブックス)、『カラスと觸籠』(小社刊)など。